

# 2010年度鳴門市人権地域フォーラム

## テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2010年8月23日(月)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A(北島中学校教諭)

パネリスト B(愛媛県愛南町教育委員会人権啓発室)

C(東京都八王子市立山田小学校教諭)

D(人権エンタメ集団「友輝の会」会員)

### 《コーディネーター A》

(笑顔で会場の一人ひとりに語りかけるように、力強くはっきりと)こんにちは。(会場より「こんにちは」と元気な声が返る)

昨年度、この会場で、Sさんがパネリストとして、「差別されていい生命なんて一つもない。」と、精一杯のメッセージを送ってくれました。その語りを受けて、さまざまな年代、さまざまな立場の方が、その思いの底にあるものを切々と語ってくれました。学校教育と社会教育の見事な融合が生まれ、子どもたちが子どもたちとつながっていくその姿が、会場全体のさまざまな年代の方々の意見を引き出していきます。そして、人権を語り合うということが、こんなに誇らしく胸を熱くするか。そんな思いが会場全体に広がり、会場全体に感動が溢れていきました。

そして、愛南町の「解放未来塾」の初代塾長であったYさんが、初めて地区を自覚した中学時代に味わった思い。そして、高校時代のこと、今の大学生として揺れる思いを語ってくれました。その思いに、また会場からさまざまな事実がしっかりと映し出され、そのことを通して、私たち自身に何が問われるか。「ひとつと」ではなく、自分の問題として同和問題を考えていくという思いが会場全体に広がっていきました。

今年も会場いっぱい、中学生、高校生、さまざまな年代の皆さんが、さまざまな地域から集まって来ています。今回、Bさん、Cさん、Dさん、3人の思いを受けて、私たちに何ができるか。私たち自身に何が問われるか。「私」を語ることを通して、「私」自身が幸せになっていく。そんな人権フォーラムにしていきたいと思います。

最初に、昨年度、Yさんから報告のありました愛南町の教育委員会人権啓発室に勤務され、地区の子どもたちの生き抜く力をどう育てていくかということをもとめ、地区の子どもたちの立ち上がりを目指して「解放未来塾」を立ち上げたBさんから、この「未来塾」にかける思いを話していただきます。

地区出身の保護者として、行政職員として、生き抜いてきた思いを子どもたちへ伝え、「未来塾」が、子どもたちの未来を切り拓いていくイメージで、今、愛南町に確かな人権教育の方向性を示しています。そんな愛南町の取り組みを報告していただきます。Bさんの、この教育にかける思いを受け止めてもらえたらと思います。それでは、Bさんよろしくお祈りします。

### 《パネリスト B》

(緊張した表情で、ゆっくり言葉を確認するように語り始める)愛南町から来ましたBといいます。今、すごく心臓がバクバクしています。一生懸命落ち着かせようとしているところです。

先ほどA先生からもありましたように、愛南町で「解放未来塾」という活動をしておりますけれども、昨年度、解放未来塾の初代塾長のYさんがこの場で報告をしました。今日、私は指導者そして保護者の一人として、

未来塾を立ち上げるまでの話をしたいと思います。

自分の情けない実態や情けない失敗等も含めて話をしたいと思います。そのためには、私自身の話をする必要がありますかなということで、未来塾の立ち上げの話の前に私の結婚のときの話を少しさせてください。

## 1 個人の中身を判断してくれると思っていた26歳のときの私

(緊張した表情で、それでも真っ直ぐに前を向き、手に原稿を持ちながら、時々目をやり懸命に語り始める)

私は今53歳です。40歳代のつもりでいるんですが、頭も白髪が目立ちゴマ塩頭になってきました。私は26歳のときに結婚し、26年、27年が経ちます。今現在24歳の息子が一人います。結婚するまでの私は、「部落出身であろうと、その人の中身を見てくれる。部落出身のBをしっかり見た上で良し悪しの判断を下してくれる。部落出身であっても最終的には個人の中身を判断してくれる」と思い込んでいましたが、いざ結婚をというときに、大変ショックを受けました。

それまでの私の26年間は、いろんな思いを持って生活をしてきました。そういう私の、26年間の人生というか、生活をまったく見ない。無視をする。「部落出身」という一言だけですべてを否定して、まるで人間ではないような言動といますか、別の世界に住む人間外の人間として判断されるということに、大変ショックを受けました。それまで、まじめに生活をしていれば、部落出身であろうとも認めても貰えるのではないかと考えていましたが、それが間違いであったことを、このときに初めて知らされることになりました。それが26歳のときです。

結婚をしようと思う相手がありましたが、その人の両親から、最初に、「おまえは部落出身だから、うちの子と結婚をさせるわけにはいかない」ただその一言で断られました。その一言で簡単に別れるというものではありませんので、私たちなりに、二人で一生懸命に考えて行動をしましたが、相手の親から、結婚させない為に様々な妨害がありましたが、耐えることと、逆に、反対されることで、「何とか結婚するんだ」と思い込むことだけしか、抵抗のしようがありませんでした。

当時、彼女はアパートに住んでいましたが、両親に家に連れ戻されて、ほとんど監禁状態になりました。一切連絡もつかない状態になりました。今日は、この私の結婚の話の詳細は省きますが、最終的には、何とか偶然に連絡が付きまして、彼女は着の身着のまま家を飛び出して、駆け落ち同然で一緒になりました。

彼女と一緒に、彼女の家から帰ってくるときに、「このままどこかに逃げようかな。どこか遠くに行きたいな」という思いもあったんですが、私たちは、何か悪いことをして一緒になるわけでもない。部落というだけですべてを否定されることへのせめてもの抵抗として、私の家に連れて帰り生活を始めました。

## 2 大森文化会館の建設…あんたがならんで誰がなるの？

(深呼吸をしながら、笑顔で)だいたい落ち着いてきました。

結婚して2年後くらいして、私の住む部落の中に、「大森文化会館」という隣保館が建設されました。春の彼岸の頃ですが、二人で墓参りに行った帰りに、その新しく建った建物を見学するつもりで、隣保館に立ち寄ったんですが、真新しい建物の玄関に白い貼り紙があり、「職員募集」と書かれていました。鍵がかかっていましたので、中を見ることはできませんでしたが、表に貼ってあった「職員募集」の貼り紙を見ながら、隣にいた連れ合いに「この貼り紙を見て、誰が応募するんかね」と言いました。

連れ合いは、それを聞きながら横で貼り紙を見ていたんですが、しばらく間をおいて返ってきた言葉が、「あんたがならんで誰がなるの？」でした。

追い討ちをかけるように、二人が結婚をするときにいろいろと反対をされていろいろな手段で妨害をされて、その度に頼る相手を一生懸命に探しました。誰かにこの状況を伝えて力になってほしい。そんな思いですっと人を探していた時期がありました。

あの状況を思い出したように、あのとき、頼る相手がなくて二人で本当につらい寂しい思いをしてきた。今、

できるかどうかかわからないけれども、職員募集という貼り紙を受けて、もし採用されれば、また私たちのように差別される子らが出てきたときに、私たちだけでも相手になってやらないといけないんじゃないかというふうに言われました。

私としては、結婚のときにしんどい辛い思いをしたから、連れ合いは、この活動に関わりたくないだろうなと勝手に想像してきましたが、まったく反対でした。どちらかと言えば、私の方が逃げの姿勢をとっていたのかもしれない。

昭和60年、4人が試験を受け、幸い試験を通りまして、大森文化会館という隣保館の主事として私の同和教育へのスタートとなりました。今日、何度も言いますが、子ども会立ち上げに関しての地域の保護者や、地域の役員さん。先生方。そういう人の思いを紹介させていただきたいと思います。

今、冒頭にありましたように、「解放子ども会」として小学校5年生から高校3年生まで、小学生・中学生・高校生と一緒に勉強をしております。小学生だけ、中学生だけ、高校生だけというところが多いと思いますが、何しろ小さい町です。私たちの特徴としては、子どもたちプラス、指導者数人だけではなく、地域の保護者も含めて地域の役員さん、小学校・中学校・高校の先生、そして、行政、隣保館というように、子どもたち以上に大人が多い会になっています。

そういう状況で活動しておりますけれど、子どもたちと活動しているひとつのテーマとして、「がんばらない あきらめない 夢を捨てない」を目指しております。今では、みんなで楽しくのびのびと活動をしています。映像ではお見せできませんが、前の方に仲間が来ています。後でフォローがもらえると期待しております。昨年、Yさんが未来塾のことを話しをしましたので、昨年参加された方は思い出していただければと思います。

### 3 愛南町の概要

愛媛県の愛南町と紹介しましたが、場所がわかる人がこの会場にどれだけ居られますか？(笑顔で会場を見回しながらの問いかけに、数人の手が挙がる)ありがとうございます。ここに来るために朝7時に出て、一回休憩を取りましたが、12時前に着きました。5時間かかります。

(身振り手振りをしながら)場所は、愛媛県と高知県の県境のです。高知県の一番西の端。愛媛県の一番南の端。そこに愛南町があります。平成16年10月に4つの町と、ひとつの村が合併して愛南町になったんですが、合併当初人口29,000人でしたが、今は、26,000人とわずかの時間にかなり減ってきております。

愛南町には、旧城辺町に部落が一箇所あります。世帯数にして約60世帯。人口にして約200人の小さな部落です。(身振り手振りをくわえながら)それが、少数点在とか、大きな部落の中でどこからどこまでが部落かわからないという混住型でもなく、ひと目見れば、「ああ、あそこ」とわかる、一箇所に集中した部落です。私もそこで生まれ、そこで育って、今でもそこで生活をしています。

### 4 社会的立場の自覚と保護者の思い

(ゆっくりと一言一言を確かめるように)昭和60年に隣保館が建ちました。子ども会というのはそれ以前からあり、活動はしていましたが、解放子ども会としての学習は全くできていませんでした。小学校、中学校の同和教育推進主任が、小学校は小学校、中学校は中学校で教科の予習・復習等を行い、地域では、お楽しみ会、奉仕活動という形で愛護班的な活動をしていました。

当時の保護者の中には、子ども達に厳しい差別の現実を教えて欲しくないという考え方が強く、解放学習という取り組みをしていなかったというよりも、できなかったと言った方がいいかもしれません。

大人の学習は、隣保館が建つ2年ほど前から月一回しておりましたが、隣保館が建ち、その事業を引き継ぎやっていく中で、私と隣保館長とで、「大人と平行して子どもたちにも解放学習をなんとかやっていきたいね」とずっと思い続けていたんですが、保護者や地区の状況の中でなかなか実現することができませんでした。

そういう状況ではありましたが、ただ指をくわえて、じっと見ているだけではだめだと思ったので、中学校の同和教育主任の先生と連携を持って家庭訪問をしながら、保護者の了解が得られるところから順に子ども達の「社会的立場の自覚」をさせて行くこともありました。

こうして、「社会的立場の自覚」をさせていきながらも、子どもたちにとっては、自分と先生と私との話し合いだけで、周りの子ども達とのつながりのないままの活動でしたので、子どもたちは辛い思いをさせたのではないかなと思います。

中学生で「社会的立場の自覚」をさせても、高校へ行けば立ち消えになっていくという状況が続いたのですが、やはり、私もひとりの親として、子ども達にはしっかりと、地区出身であるということを自覚して差別と立ち向かってほしいと思うし、マイナスイメージが刷りこまれる前に、しっかりと正しく自覚させてやりたいという思いがありました。

保護者みんなの意見がそろわないという状況ではありましたが、やろうという保護者が少しずつ集まり、子どもたちに伝えるために、親としてしっかり基本的な勉強をしたい。そんな辛いことを教えたくないと言う親達にも、我が子の将来のために、一緒に教えていけるようになりたい。一人では何も出来ないけど、みんなで一緒にやれば出来る。そんな想いから「保護者会」をつくり、平成6年頃から月1回、子を持つ親を中心に勉強を始めました。

内容はといえば、井戸端会議的に世間話を中心でした。しばらくの間は、家庭のこと、職場のこと、子どもなことなど雑談が中心でした。しかし、何でも言い合えるような親の仲間づくりが出来た頃から、少しずつ変化が起こり、子ども達に伝える準備をしてきました。

そして、心構えの出来た親からそれぞれの家庭で、それぞれの親の口から、子ども達に伝えて行こうという雰囲気が出来てきました。厳しい話だからこそ、第三者からではなく親から伝えよう。親だからこそ伝えられるという、保護者会でのルールのようなものが生まれていました。

## 5 ここが同和地区だと伝える親の思いと 聞かされた子の思い

私の息子は、当時小学校4年生でした。当時の隣保館主事として、保護者会をまとめる者のひとりとして、みんなの先頭に立って私が見本を示すという思いもあり、我が子に、ここが被差別地区であること。私達夫婦が結婚差別を受けたこと。近い将来お前も差別を受けるかもしれないこと等々を、ポツリポツリと理解できるように、優しい言葉で、しっかりと伝えました。

最後に、悲観するのではなく、強くなって欲しいこと。親も乗り越えてきたこと。何があってもきちんと親に伝えて欲しいこと。お前が人を差別することのないように。そんな思いを一生懸命伝えました。

息子としては、優しい、優しいあのじいちゃんと、ばあちゃんがそんな差別をした。ということに強いショックを受けているようでした。当時のことを子どもに伝えるときにも、じいちゃんばあちゃんに対して悪いイメージを持たないようにという形で伝えましたし、子どもも悪く言うようなことはありませんでした。

ある親は、全てを伝えた後、不安そうな我が子の顔を見て、「何があってもお母ちゃんが守ってあげると言っておきしめることしかできなかった。」と、保護者会でそのときの様子を辛そうに話してくれたこともありました。

それぞれの家庭で、それぞれの親の思いを持って、自分なりの言葉で我が子に伝えていきました。伝えた後、親達には多少の不安もありましたが、以前にも増して、顔が明るくなりました。会が和やかに明るくなりました。笑顔が増えていきました。

悩んで、悩んで、やっと伝えることが出来たことの安心感、子どもと部落差別について語れるようになってきたこと。保護者会での共通の話題が増えたこと。何より、壁をひとつ乗り越え、親としての責任をひとつ果たしたという、嬉しさと安心感がありました。

## 6 全国同和教育研究大会高知大会で伝えられた大きな学び

(ゆっくりと力強く)平成9年、高知県で開催された全国同和教育研究大会で、当時城辺中学校に勤務していた同和教育推進主任の先生が、「保護者会の活動」について発表しました。保護者会を通じて学習し、親同士の横の関係を築きながら子ども達に伝えるようになったこと。子どもと同和問題について話ができるようになったこと。等々、全国同和教育研究大会で発表できるということで、自信を持って活動内容を発表しました。

そこで、大変ショックなことが起こりました。それに気付かされたのは、会場の参加者ではなく、同じ分科会で報告者として参加していた高知の高校の先生から、会の休憩時間に舞台裏でひっそりと聞かされた一言でした。私達と同じような状況で、同じように伝えた親の事や、伝えられた子ども達のことを聞かされたからでした。

私たちは、親として子どもに伝えるために、いろいろな人の話を聞いて、事前に学習し、長い時間をかけて伝える準備をしてきました。保護者会やつくし会、同和教育を通して多くの仲間のつながりがあり、その安心の中で子ども達に伝えてきました。

でも、その高校の先生からの、「伝えられる子どもの方はどうでしょうか。急にしんどい思いをぽつんと伝えられて、伝えられた子どもたちはすごく不安だったろうし、誰にそれを話ができるのかということ、あなたは考えたことがありますか？」

その言葉に振り返ってみると、自分たちのことしか考えていなかったことに気づかされました。子ども達には伝えてやるのが一番いいんだと考えていただけで、伝えられた後、もちろん、親としては寄り添うことはできても、普段の親以外と過ごす時間の中で、友だちの中で話す相手がいたのかな。そういうことを考えたとき、親として恥ずかしい、情けない、子どもに対して申し訳ないという思いが沸き起こりました。

(原稿をテーブルにおろし、真っ直ぐに前を見据え語り始める)伝えられる側の環境を作ってやらないまま伝えてしまいました。伝え後も、十分な支援体制も構えないまま伝えてしまいました。しんどい事を伝えられ、沈み込んでいる子ども達の姿が見えずに、伝えることだけで親の責任を果たしたと喜んで私達を見て、高知県での全国同和教育研究大会で、この高校の先生は、自身の失敗を繰り返さないようにと、私たちに優しく知らせてくれました。

私たちは、このときの、「立場を明らかにすることで、子ども達を一人にさせてしまった。孤立させてしまった。仲間を作ってやれなかった」という大きな失敗・見落とし・自分たちだけのことしか考えていないことへの気づきを元に、その大会から帰ってきてすぐに行動に移しました。

## 7 話す相手を探し続けていた子どもたちの現実への気づき

立場を伝えた保護者会に参加する親はもちろん、親から立場を伝えられた子ども達、これを機会に伝えたいと考えている親と子ども、地域の小学校中学校の保護者と子ども達。できるだけ参加してもらおうようにして再度社会的立場の自覚について話し合いを持ちました。

結果、やはり、心配していたことが子ども達の中に起こっていました。

親から伝えられたものの、相談する相手もなく、相談できる相手を必死に探し続けていた子ども達の姿を、そのとき初めて確認することが出来ました。

誰かに話を聞いてほしい。私たちが結婚を反対されて「誰か」と人を探していたように、子どもたちも、一生懸命話す相手を探していたんです。私たちは、「もしかしたら将来差別をされるかもしれない」という心配をしていたのですが、子ども達は、それ以前に、「そんな話を聞かされても、私たちは何をすればいいの？」という思いで苦しんでいたように思います。その会が終わった後の子どもたちからは、「あんたも知っちゃったの」とか、「あんたはまだ聞いてないと思いよった」とか、「はよ、相談したらよかった」という会話が飛び交いました。

子ども達の間では、普段の会話はするものの、同和問題や差別のことについては、お互いが知らなかったら

いけないと気を遣って、その話題に触れなかったり、知らされても、一人で悩み、孤立している者ばかりだったのです。

みんなが集まり、共通の話題で話し合った後、子ども達の顔が変わるのが分かりました。

差別を受けるかも知れないという心配よりも、今まで隣に居る同級生や仲間に話せなかった苦しみの方が大きかったようです。

私たちは、この会を通し、子ども達の間でこの会話が交わされたとき、初めて「社会的立場の自覚とはどういうことなのか」ということを知りました。「社会的立場の自覚」は、当事者一人に教えることも大切ですが、それだけではまだ半分です。そのことを話題として、親以外に話のできる相手を作らないうちは、「社会的立場の自覚をさせたことにはならない」と思うのです。

今日のような会で、自分の思いを自分の言葉で伝え合うこと。周りに仲間がいることを実感できること。安心できること。これが大事だと思うんです。「社会的立場の自覚」をさせることの最終形態は、「仲間をつくり・自分の思いを伝えることが出来る環境を作る」ことではないかと思います。私たちが、我が子を犠牲にしながら身を持って体験したことです。「解放子ども会」の必要性を強く感じたときでした。

それでもまだ、「社会的立場の自覚」をさせて欲しくないという家庭もありました。こういう活動をしようと声をかけるんですが、「そういう活動をするのなら、子どもを隣保館に行かせない」ということで、それまで一緒に勉強会に来ていた子どもが、ある日突然来なくなるということも起こりました。それは、子どもたちのせいではなく、親たちが教えて欲しくないという思いからのことです。私たち保護者会も、そういう親たちにも工夫をして、親子ともども一緒に勉強しようと働きかけをするんですが、意思が固くなかなか参加してもらえない状況が続きました。

## 8 解放子ども会の立ち上げ…20年の願いの実現

それから6～7年後の平成17年4月に、「解放子ども会」が立ち上がりました。隣保館が建設されて20年、大人たちと同じように、子ども達にも解放学習をしてほしいと願い続けてきて、振り返ってみれば、初代館長・二代目館長の時期が過ぎ、三代目館長に引き継ぎ、やっと解放子ども会が立ち上がりました

保護者会の活動開始後10年。ちょうどその頃というのは、平成14年に法律が打ち切りを迎えて、各地で、「補助金カット」とか教育方針の変更等もあり、今までやっていた子ども会活動がなくなったり、活動が衰退していくそんな時期でしたが、愛南町では、その動きに反する解放子ども会の立ち上げになり、「どうしてそんなことができるのか」と聞かれるんですが、私たちとしては、法が切れる以前の昭和60年の思いを持って、それがやっとできただけなんです。法律があろうがなかろうが、差別がある以上、私たちとしては子どもたちと一緒に立ち上げていかなければならない。その思いがやっと実現できただけなんです。

この資料の中には、子どもたちが目を輝かせながら活動する姿を紹介したいと書いていたんですが、今日は、塾生も来てくれていますので、後半の意見交換の中で一言でも、返してくれるかなと期待をしています。

これから、皆さんの地域で子ども会の取り組みがどうなっていくのかわかりませんが、私たちの思いというものでも参考にしていただければ、子どもたちは伸び伸びと育っていつってくれるのではないかなと思います。「社会的立場の自覚」ということについても、私たちは我が子を通して感じてきました。孤立させないということ、仲間を作ってやるということ、周りの大人がしっかりとサポートして守ってやるということ、そういうことを目指して活動しています。

子ども会の活動報告の場として、毎年「愛南町人権ふぉーらむ」というものをおこなっています。その収録を、今日200部くらい持って来ています。皆さん全員にというわけにはいきませんが、団体で来ておられる所は1部か2部ということにいただければ読んでいただけるかと思えます。

解放子ども会が設立されて今年で5年目を迎えました。今年、「愛南町人権ふぉーらむ」の最後に歌おうということで、「解放子ども会 未来塾の歌」というのを作りました。「私たちの合言葉」という題名で、会が始

まる前にBGMで流していただいていたんですがわかりづかったと思います。愛南町から一緒に来た仲間とここで紹介したいと思います。

(フロアから、愛南町の参加者全員が前に移動し、フロアに向かって合唱が始まる)

## 「私たちの合言葉」～僕らのノンフィクション～

作詞 09, 未来塾塾生・指導者

作曲 秋本良次 編曲 土井俊一

あの春に出逢えた仲間  
絆はかたく結ばれて  
永遠(とわ)の約束した日から  
いつも笑顔であふれてる  
時には壁にぶつかって  
とまどうこともあるけれど  
未来を信じ勇気を出せば  
今を生き抜く力に変わる  
さあ 一緒に描き続けよう  
やさしい花咲く 明るいあした  
がんばらない あきらめない  
夢を捨てない  
それが私たちの合言葉

あの冬に出逢えた仲間  
心は広く温かく  
思いやりの輪がつながって  
厳しい冬を溶かしてく  
時には孤独につぶされて  
涙する日もあるけれど  
扉を開き その手のばせば  
未来は希望に満ちていくから  
さあ 一緒に歩み続けよう  
ありがとうの歌 響かせながら  
がんばらない あきらめない  
夢を捨てない  
それが私たちの合言葉

(1番と2番の間の間奏中、「まだ歌っていいの?」「歌おうよ」と笑顔の中で顔を見合わせながら、目で語り合う愛南町のメンバーの姿があり、笑顔の中での力強い合唱の終了と共に、会場より大きな拍手が起こる)以上で終わります。(拍手)

### 《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。「私たちの合言葉」。この歌は、昨年度の「愛南町人権ふおーらむ」のフィナーレにおいて、解放未来塾の塾生が壇上に上がり、愛南町にある南宇和高校の吹奏学部の生演奏による会場全体との大合唱が行われました。

出会った仲間と本当の仲間になっていくために、人権教育があるんだと思います。人権教育のよこびは、「出会い」と「つながり」です。Bさんが今語られたように、すべての行政職員が自分のことを自分の言葉で、安心して堂々と語れる関係ができれば、その地域社会が大きく変わっていくと思います。学校においても、すべての教員が自分を生き生きと堂々と安心して表現する関係性ができれば、子どもたちはその思いを重ねて、子ども自身のことを安心して語っていく。そんな関係が築かれていくと思います。

『ひとごと』から『わがこと』へ、なかなか自分のことへなりません。やっぱり引いてしまいます。あきらめてしまいます。「私一人が頑張っても…。」そんな気持ちになります。でも、歩かなければ道はできません。

昨年度の「愛南町のふおーらむ」で、Dさんがパートナーの茂樹君との出会いを語ってくれました。本当に厳しい結婚差別がありました。しかし、「私が変わる」「私の人生だから私が幸せになる」と、彼女は歩きました。私は、共に壇上にいてDさんの語りに涙が出ました。あれだけ反対した父親・母親が、家族が、Dさんの長男の里温ちゃんを通して、しっかりと解放されていく姿があります。

現実には厳しいです。しかし、歩かなければ道はできません。生まれて3ヶ月目、里温ちゃんを初めてお父さ

んお母さんの元へ連れて行きます。そのときの語りが今も私の心に響きわたります。

2007年7月1日。私は結婚後初めて、彼と里温(息子)と3人で実家に帰りました。…(中略)…家の中に入りました。そこには父親が座っていました。父親はテレビで野球を観ていました。無視をするわけにはいかないので、父親に「ただいま、帰って来たよ」と言いました。そうすると、父親は、チラッとこちらを見て、小さな声で、「元気にしよったん」と言いました。私は、「うん、元気にしよったよ。子どもが生まれたから、今日、連れて来たんじゃ」と言いながら、寝ていた里温を父親のところに連れて行って、抱っこしてもらいました。父は、「よしよし」里温をだっこしながら、「男の子か？女の子か？」と聞きました。「男の子だよ」と答えると、「また、帰って来いよ」と言ってくれました。…

部落差別の現実切ないです。しかし、それを乗り越えたとき、人間は本当に幸せになります。N君の「私たちは幸せになるために結婚します。」この言葉がやっぱり心に響きます。Dさんの思いに触れ、Dさんを通して私たちに問われているものを共に考えていく、そんな時間にしていきたいと思います。それではDさんよろしくお祈りします。拍手をお願いします。(拍手)

## 《パネリスト D》

(両手でしっかりマイクを握り締めながら)皆さん、こんにちは。Dです。ここ数年間、鳴門の人権フォーラムには家族みんなで参加させてもらっています。いつもは夫の方が前で話をする事が多いんですが、今日は、被差別部落外に生まれ育ち、部落差別と向き合ってきた私の話を聞いて欲しいと思います。

### 1 結婚を決意して

A先生がさっき言われていたんですが、結婚差別についての話をしたいと思います。今から5年位前、被差別部落出身の彼と出会い結婚を決意しました。そのことを伝えるために、私は実家に帰りました。私の生まれたところは、「部落がない」と言われているところで、私の両親からは、幼い頃から差別的な言葉をたくさん聞いてきました。

彼が部落出身者だとわかると、反対をするというのはわかっていましたので、母親に、「来年くらいに結婚したい人がいる」ということを伝えました。すると、まず母親から返ってきたのは、「どこの人？」という言葉です。私が普通に「山川町の人なんよ」と答えると、母親から次に返ってきた言葉が「部落の人と違うだろうな」でした。

「山川町イコール部落」というふうには、私は全然考えたこともなかったので、そういう言葉が返ってきたことにまず驚いて戸惑ってしまいました。そのときにはそれ以上の話はせず、「もし、部落出身の人やったらどうするの？」と母親に申しました。すると、「絶対に許しませんよ。家を出て行きなさい。もう、絶対家には帰って来れんでよ。」こう言いました。

そのとき、私は、そのまま生活していた香川の家に帰ったんですが、母親の中には、「もしかしたら、娘の彼は部落出身ではないだろうか」という気持ちがずっとあったと思います。母親の兄に当たるおじがいるんですが、このおじは、最初、「最近部落とか言わんぞ」と言っていましたから、部落のことにっては、少しは理解があるのではないかなと心強く思っていました。親戚の中に私たち二人のことをサポートしてくれる人がいるんじゃないかと心強く思ったんですが、実は、そのおじが、山川町の知り合いに「聞きあわせ」をして、反対する立場になります。

(落ち着いた表情で、一言一言確かめるように)そのおじが聞きあわせをした内容は、「山川町のNというのはどういう家かな」というものでした。その問い合わせに対して、部落かどうかを言ったのかはわからないんですが、こう返事をしてきました。「絶対にやめておいた方がいい。何かあったら、親戚とかいっぱい集まっ



てお酒を飲んでドンちゃん騒ぎをするらしい。」「結婚をしたら、大事に大事にされて家に帰らせてくれないよ。」

## 2 聞き合わせから始まった結婚差別

どこが悪い話なのかわからないんですが、母親は、その言葉をマイナスに捉えて、私に電話をかけてきました。「絶対に、もうその人とは会ってはいけない。おじさんが怖い人だって言っていた。」そう言いました。そんな、見ず知らずの人の話を信じている母親に、「実際に会ってみたらどんな人かよくわかるよ。」と言ったんですが、もう、聞く耳は持ちませんでした。

そんな中で、親はいくら待っても全く聞く耳を持ってくれないので、彼の講演したときのビデオを観てもらいました。彼の2時間くらいの講演をしたときのビデオで、それを観ることで、彼が部落出身というのはわかるんですけども、彼の生き様だったり、彼の信念だったり、そういうことがわかるビデオになっていますので、それを観てもらいました。

そのビデオを観た母親は、彼が部落出身とわかった時点で、気が狂ったように家の中を走り回ったそうです。走り終わって私に電話をかけた。そんな状況でした。父親は最後までビデオを観てくれたんですが、「わしは、部落の人は嫌いだ。いい人だということはわかるが反対だ」と言いました。そんな中で、母親からは毎日のように電話がかかってくるんですが、一向に私が言うことを聞かないので、「一度家に帰ってきなさい。話し合いをするから」と言ってきました。

そこで私は、11月頃に、話し合いのために家に帰りました。家には、母親の兄と父親の弟、私にとったらおじが二人来ていまして、話し合いというより説得です。何時間にもわたる説得がおこなわれ、私が別れると言うまでずっと反対をしてきました。父親に至っては、泣きながら「結婚は絶対やめてくれ」と言ってきました。

(当時に思いを馳せ、言葉に詰まりそうになりながら)私は何も悪いことはしていないのに、こういう父親や母親の姿を見ていると、「私がすごく悪いことをしているのではないのだろうか」という思いになってきました。「自分さえあきらめれば、お父さんお母さんを苦しめずにすむのだろうか」という気持ちにもなってきました。

すごくしんどい思いの中で、実家からその頃住んでいた香川の家に帰る途中、彼から電話がかかってきました。(思いを切り替えるように笑顔で)「今からな、飲み会にいくで。」そう言って、近くの居酒屋さんを借り切って、彼が仲間や友だち20人くらいを集めてくれました。そこで、すごく温かい言葉をかけてくれたり、励ましてくれました。ものすごくしんどい気持ちだったんですが、少し楽になって、「もう少し頑張ってみよう、頑張れる」と思いました。

でも、親は全然私の話を聞いてくれないので、どうしたらいいのかなと考えました。彼が人権の活動をしていますので、彼が親と会ってくれたら、彼の良さもわかってくれるし、彼が親を説得してくれるのではないかなと思いました。彼にそのことを言ったんですが、「相手が会わないと言っている以上、俺は絶対に会いに行かない」と言います。その後、彼のお父さんやお母さんとそのときの状況を話す機会がありました。

## 3 挨拶に行くことを決意した彼と姉からのメール…

私の家族が差別をしているということについて話をしました。すると、彼のお父さんが、「茂樹、一回だけ挨拶に行ってみて来い。」と言ってくれました。彼は、父親がそう言うのだから、家族を代表して一回挨拶に行こうと決意してくれました。

寒い冬の1月くらいの話です。かねてから私を支えてくれていた姉に、「明日、彼が突然に行くかもしれない。でも、よろしく頼むね」とメールを送りました。その姉からメールを通し返ってきた言葉は、私の家は山間部にありますが、「雪が積もって凍ると危ないから、明日はやめておいた方がいい」2つ目に返ってきたのは、「父親が風邪で寝込んでいる。体調が悪いからやめておいた方がいい」3つ目は、私の兄の子どもである

甥っ子と姪っ子がいるんですが、「何曜日と何曜日は、姪っ子甥っ子が来るからやめておいた方がいい」4つ目に返ってきたのが(思いが溢れ、こぼれる涙を抑えきれず涙を拭きながら)「突然家に来るのは失礼じゃないか」

この姉の返事に対し、「今まで、私がいくら会って欲しいと頼んでも、会ってくれないから突然行くことになるんだよ。彼とか、彼の両親の思いとか全然わかってない。」そんな悔しい思いでした。そのことを彼に伝えると、彼からは、「もう2度と家には行かん。2度と会いに行くことはないから、そう姉ちゃんに言うておいて」と言われました。彼の父親にもこのことを伝えたんですが、お父さんもカンカンに怒ってしまいました。

彼も会いには行ってくれない。親も私の話は聞いてくれない。そういう状況で、どういうふうに親を説得していいのかわからなくて……。周りの人の中には、「親を説得する前に入籍して、それから伝えるという方法もあるよ」ということも言われていたんですが、私は、28年間ずっと私を大事に育ててくれた両親に結婚を祝福して欲しくて、「わかって欲しい」という思いで耐えてきていたしんどかった時期に、隣におられるBさんの地元、愛南町で講演会がありました。

#### 4 高校生の前で話した思いと帰り際に言われた一言

南宇和高校という学校でA先生が講演をされるというので、同行させてもらいました。A先生から「Dちゃん、自分の思いをしゃべってみるか？」と言われ、講演会の最後に、しんどい思いを数分間しゃべらせてもらいました。高校生に対しての話なので、もう少し前向きな話をしないといけないかなと思ったんですが、全然そんな気分になれなくて、自分の辛い思いや、「何年かかっても親にわかって欲しいと思います」という気持ちを話しました。

その、南宇和高校からの帰り際にA先生から言われました。「Dちゃんなあ、周りが何て言っても、最後は自分自身だからな」と。(語りながら抑えきれず涙が溢れる)その言葉が私の心に刺さりました。私は、私のことに必死で、親を変えることに必死で、本来の目的を見落としていました。

彼からは、「幸せになるために結婚しよう。」と言われたのに、全然自分は幸せに向かって歩いていない。毎日泣いてばかりで。そういう姿は全然幸せそうに見えない。そういう姿を見ると、「部落の人と結婚すると言うからそんな思いをするんだ」と、親にも思われてしまう。そういう気持ちに気づきました。

よくよく考えてみると、一番しんどいのは私ではなくて、何も悪いことをしていないのに差別をされている、彼とか彼の両親じゃないのかなと気づきました。(自分の思いを確かめるようにかみ締めながら)そして、逆の立場だったら、本当に結婚しようという気持ちがあるのかどうかもわからないような、私のような子は嫌だなあと思いました。自分がしっかりしなければ。彼に結婚をして良かったと思ってもらえるような人にならなければいけないと思いました。

そういう気持ちになって、改めて「結婚しよう」と思えるようになりました。「親がわかってくれないのであれば、親が変わってくれないのであれば、私自身が変わればいい。自分自身が幸せのために前向きになればいい」そう思いました。そう思うとすごく気持ちが楽になってきました。

愛南町にいたときにも、Bさんが奥さんのところに連れて行ってくださり、自分たちの結婚差別の話をしてくれました。実際にも奥さんにも合わせてくれて、奥さんからの言葉もたくさんいただきました。「すごくしんどい思いもあってけど、今は幸せです。逆に、まだ両親に会えていない人もいます。でも、やっぱり、みんなそういう強い心を持って、自分の信念を持って結婚した。」そういう気持ちが伝わってきました。

#### 5 全くかかってこなくなった親からの電話

そういうみんなからの支えもあって、私たちは7月12日に婚姻届を出すことができました。親には結婚して2ヶ月くらい経ってから手紙で伝えました。「結婚したというのがわかると、怒って電話をかけてくるんだろうな」と思っていたんですが、それまでは頻繁にあった電話が、全くなくなりました。

少しほっとした気持ちもありましたが、それまで、両親からは「部落の人と結婚するんだったら出て行け」と言われていたんですが、「実際そうだったんだ。部落の人と結婚したら、血のつながりなど関係なく、親子の縁は切れるのかな」と思いました。すごく複雑な気持ちだったんですが、それからすぐに妊娠もしましたので、そのことについては、あまり深く考えないようにしました。

平成19年5月21日に、今日もここに来ています長男、里温が誕生しました。(前の席に座っている里温君に向かって、にっこりとしながら)ふるさとの「里」に「温かい」と書いて「里温」です。「ふるさとの温もりを一身に受けて、温かい人間になって欲しい。その温もりを、大きくなったときにみんなに伝えていって欲しい」という気持ちを込めて、名づけました。里温が生まれてから、いろんな方から電話とかメールをいただいて、「Dちゃん、一回実家に帰りなさいよ」と言ってくれたんですが、私はまったく家に帰る気になりませんでした。なぜかと言うと、私は何も悪いことはしていないのに、こちらから下手に出て家に帰ることはないという気持ちがありました。それに、家に帰ることに対してすごく不安があったこともあります。

## 6 家族3人での初めての里帰り

(表情も落ち着き、笑顔も見られながら)でも、里温の顔を見ていたら、すごくかわいくって、親も私のことをかわいいと思って育ててくれたのかなと思ったら、「親に抱っこして欲しいな」という気持ちになりました。里温が生まれて2ヶ月くらい経って、実家へ帰る決意をしました。

里温と彼と3人で家に帰りました。家に帰ると、まず、おばあちゃんが庭に出てきてくれました。「D、帰って来たんで。まあ、家に入りない。」おばあちゃんにそう言われて、私は家に入っていいのか戸惑ったのですが、勧められるまま家に入ると、おばあちゃんがお茶を出してくれました。

おばあちゃんが、隣の部屋でテレビの野球を観ていた父親に、「Dが帰って来ただよ」と言うと、父親の「何しに帰ってきたんだ！」という声が隣の部屋から聞こえてきました。「ああ、やっぱり怒っているな」と思ったんですが、すぐに母親が帰ってきました。

私たちを見るなり、すごく驚いた顔をしていたんですが、母親は何の躊躇もなく、里温を抱っこしてくれました。「よしよし。かわいい子やな。男前の子やな。」と言いながら抱っこしてくれました。その後、外でしばらくおばあちゃんとお母さんと、お姉ちゃんと、彼と私とで雑談をしていました。

家の中に入る用事があったので、私が入ると、父親はテレビで野球を観ていました。無視はできないので、「お父さん、ただいま。」そう声をかけると、父親はチラッとこちらを見て、「元気にしよったん？」と聞いてきました。「元気にしよったよ。子どもが生まれたから連れて来たんよ。」そう言いながら、私は隣の部屋に寝ている里温を父親の元へ連れて行きました。父親は里温を抱っこして、「よしよし。男の子か？女の子か？」と聞きます。私が「男の子だよ」と答えると、「また帰って来いよ」と言ってくれました。

## 7 交流を通してわかり合える思い

帰るまではすごく不安だったのですが、「家に帰れて本当に良かったな」と思いました。(表情が明るくなり、笑顔も見られる)父親が「また帰って来いよ」と言ってくれたので、毎週のように里温を連れて家に帰りました。最初はちょっとぎこちなかったんですが、次第に父親、母親も慣れてきて、母親は、これまで結婚を反対していた親戚の家に、里温を連れて行くことをしてくれていました。

それから1年が経ち、二人目の子ども(次男の響希(ひびき))が平成20年9月3日に生まれました。その、次男の出産の際には、母親が来てくれました。(うれしそうに)里温のときには、彼と二人だけで頑張ったのですが、母親が来てくれたことがうれしくて、「痛い」「痛い」と甘えてみたりして腰をさすってもらったりしました。母親は、彼に、「私な、結婚を反対しとったんだけど、こんなに優しいだんなさんで、今は良かったと思う。」そう、彼に直接話をしていました。口に出してそういうことを言っているのだから、よほど反省して、身にしみて、自分の間違いだったということに気づいてくれたんだと思います。それから、里温と響希を連

れて、ちよくちよく実家に帰っています。「里温の声を聞かせて」とか、よく電話もかかってきます。

今年の1月にも、おばあちゃんの米寿の祝いとお母さんの還暦祝いがありました。そういう所へも、家族4人で参加しまして、すごく楽しい時間を過ごすことができました。甥っ子、姪っ子も、すごく里温と響希を大事にしてくれています。

やはり、そういう交流があって、次第に分かるころというのがあると思うんです。父親、母親も、彼や子どもたちと直接会うことで、話をする中で、今まで持っていた「怖い」というイメージがだんだん無くなっていくのではないのかなと思います。辛い思いもあったんですが、本当に頑張ってきてよかったなと思いました。正しいことを信じて頑張ってきた。みんなに支えてもらって、頑張ってきたよかったです。ありがとうございます。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(Dさんの思いをつなぐように、力強く)地区と地区外との交流がなかなか進みません。しかし、ちょっとしたことで心が通います。つながりあえたときに、あの差別意識は何だったんだろうかと思え、見事に私たちは解放されていきます。今日も会場いっぱいの方が集まってくれています。私たちの家庭で、私たちの職場で、私たちの地域社会で、同和問題を「わごこと」として考え、人間の幸せって何だろう。私の幸せって何だろう。そのことを深く心に刻んでいく、そんな生き方をつなげていけたらと思います。この後、愛媛県で生まれて、小学校の教師を目指し、愛媛県で小学校の先生になった。しかし、7年で愛媛県を離れ、東京都で小学校の教師になる。そこには、誰にも語られない現実があったと言われます。そして、今、東京都で7年目を迎える教員生活。部落出身教師として、愛媛県での7年、東京都での7年、14年の営みを振り返りながら、同和問題に対する思いを語ってくれます。C先生、ずっとつながりのあるBさん、そして、部落差別の現実を必死に生きたDさんの思いを受けて、先生自身の思いを語ってください。皆さん、拍手をお願いします。(会場から大きな拍手)

## 《パネリスト C》

(はにかみながら、一言一言を大事にかみ締めながら)皆さん、こんにちは。Cと申します。今日、この会に来ることをすごく楽しみにしてきました。でも、今、大勢の皆さんの前に座って、とても緊張しています。これから、いただいた時間をまっとうできるようにきちんと話せるかもかなり不安です。そのため、原稿を見ながらお話をさせていただくことをお許してください。

### 1 生い立ち

私は、1967年昭和42年に、愛媛県に生まれました。父も母も愛媛の同和地区の出身です。私が生まれた直後から、6歳の誕生日の少し前までは、愛知県や埼玉県で過ごしました。電車の車両を作る会社の下請け業者として、父たちが働いていたからです。

しかし、父が、両親が住む愛媛に帰ろうとしたのが、私が小学校に入学する前の年でした。愛知や埼玉で過ごした幼稚園時代には、そんなに貧しかった思い出はありません。小さいので、わからなかっただけかもしれませんが…。でも、両親はよくけんかをしていたので、朝起きて、母がいなくなっていたらどうしようと、不安におびえていた夜が多かったことは、よく覚えています。

そんな子どもだったので、愛媛の田舎に帰り、2時で帰れる幼稚園から、4時までいなければいけない保育所が変わったことになかなかなじみませんでした。年長なのにお昼寝の時間があるのもすごく苦痛で、お昼寝なんかしないで早く家に帰りたいと、いつも思っていました。幼稚園は、42日夏休みがあったのに、保育所はお盆の3日間しか夏休みがないこともかなりいやで、「なんで田舎に帰ってきたんだろうね」と、姉とよく話したものでした。

「ここらへんの言葉は、使ったらだめだよ」と、母には愛媛の方言を使わないように言われ続けていました。「ここらへんの言葉」というのは、同和地区の人たちの独特の言葉のことだったのかなと、今ふり返ると感じます。田舎にUターンし、同和地区に住み始めたときには、母の中にも差別されることへのガードが固かったのかなとも感じます。

こうして小さいときからのことを順番に話していると、軽く時間をオーバーしてしまうので、話し方を変えます。私が、この徳島県に来たのは、今日が4回目です。そこで過去3回のことを軸にお話をします。

## 2 1回目の徳島～やる気満々の私～

1回目は、1989年(平成元年)大学4年のときです。そのときまで、徳島県は行ったことがない所でした。愛媛にUターンしてからは貧しかったので、ちょっとした旅行やドライブなどできる家ではなかったのです。隣の高知県にも、行ったのは小学校の修学旅行のときだけ。香川県も高校の修学旅行や大学に行くときに車で通過しただけでした。

大学4年のとき、山梨の大学から、愛媛の地元で教育実習をするために帰ってきました。実習をした学校は、恩師が勤務していた学校でした。母校ではないので、かなり遠く、東京に住んでいたおじが用意してくれた車で通うために、山梨から愛媛まで移動し、4週間の実習をさせていただきました。

恩師というのは、私が小学校に入学してから中学校を卒業するまで、9年間もわが母校に勤務された先生です。この先生が同和地区出身の先生でした。今日のパンフレットに書いた「Cさんとこには遊びに行ったらいけんって言うたんで。」という小学校2年生のときの友だちの発言を、母が学校に相談できたのは、この先生がいらしたからだと思います。

この先生を始め、全員の先生方がまとまって同和教育に取り組むようになっていた母校は、我が家から歩いて1分もかからない所にありました。そんな小学校の先生方にずっと見守られる形で私は育ちました。

最初はガードが固かったと思われる母は、その恩師や他の保護者の方と一緒に、月1回の同和教育の勉強会を自主的に開催するほどになっていきました。中学生になってからも、学期末のたびに通知表を見せに小学校に行き、先生方に励ましていただくことを目標に頑張っていた気がします。(丁寧に力強く)当時は、頑張った分だけ未来は明るいと思えるような社会だったし、同和地区出身だからこそがんばるぞというような気負いもありました。そんな環境の中で、私もあの先生たちみたいな教員になりたいという思いを膨らませていったのでした。

教育実習は、大学3年生の夏休みに恩師にお願いに行き、「来年度よろしくお願いします」ということになったのですが、年度が変わると、恩師は別の学校に異動していなくなっていました。しかし、面識のない先生方にもとてもよくしていただきました。

「本校では、どんな理由でも、2日連続で欠席した児童の家には家庭訪問をすることにしています。休んだ翌日、学校に来るときは、誰にでも不安があると思いますから。」その実習のときに同和教育推進主任から聞いたこの言葉は、今でもはっきり覚えています。この言葉につながる、厳しくも温かい同和教育の実践もたくさん見せてもらいました。

私が受けた同和教育を、今度は子どもたちに返していく番だと意気揚々とした気持ちで実習を終え、東京へのフェリーに乗るために訪れたのが1回目の徳島でした。まだ教員採用試験の結果は出ていませんでしたが、やる気マンマンで、はつらつとした私がいました。

## 3 2回目の徳島～不安の中を逃げるように乗り込んだフェリー～

2回目は、忘れもしません。1997年(平成9年)4月2日です。私は、その2日前の3月31日で愛媛の教員を退職しました。そして、この日、また徳島から東京へのフェリーに乗ったのでした。

愛媛での7年間の教員生活は、とても充実していました。失敗はいっぱいしました。家庭訪問に毎日行って

も、不登校状態が続いた子もいました。私が受けた同和教育を子どもたちに返していこうとは思っていましたが、同じ町内で行われている子ども会には、忙しさを理由に、全く顔を出せないままでした。でも、多くの失敗を通して、先輩の先生方や子どもたちからたくさんのことを学びました。7年間の間にちょっと自信もつき、私は、同和教育と平和教育にこだわって、これからの教員生活を送っていききたいとも思うようになっていました。

しかし、その前の年に、東京に行っていた父が愛媛に戻ってきて、私の周辺をうろうろすることに困り果てていたのです。実は、高校2年の終わりに、父と母の別居が始まりました。その後、父は東京で働いていたようですが、体を悪くしたとか歳をとったとかの理由で、仕事にありつけなくなったらしい様子でした。

父は、地理に強い人だったので、行き先をつきとめると、日本中ならどこまでも追っかけてくることができるとは持っていました。お金がなくてもそれをやってしまう人でした。「父から逃げる」ことが目的で、愛媛の教員を退職することにした私だったので、「東京」という行き先は、誰にも言えないことでした。愛媛の教員をしながら、東京の教員採用試験を受けに行っていたことも、当時の管理職くらいしか知らない内緒の話でした。

熱く同和教育の実践をされていた先輩の先生方にも、ちゃんとあいさつもしないまま、本当に逃げるように、荷物をいっぱい積んだ車を走らせ、徳島からフェリーに乗ったのです。涙の溢れそうな思いを必死でこらえながらこれで父から逃げられると思うと、少しホッとしましたが、東京でちゃんと働けるのだろうか、いつか父に探し当てられたらどうしよう。という不安。どうして私が、愛媛の教員を辞めなきゃいけなくなったんだろうというような、恨みのような気持ち。複雑な思いでの船出でした。

#### 4 3回目の徳島～板野中学校の全体学習参観～

3回目の徳島は、1999年1月です。そこに座っておられるA先生が板野中学校にいらしたときです。板野中学校の全体学習を見せていただくために、自分のクラスは他の先生にお願いして、飛行機で日帰りする予定で徳島に来ました。東京に行って2年目のことでした。

東京に行って、最初に担任したのは、学級崩壊により、担任の先生が病気で休職されたクラスでした。6年生でした。愛媛の学校と違うことが多すぎて、戸惑うばかりの私には、そのクラスを立て直すことはできないまま卒業式を迎えました。悔しさがいっぱいでした。「2年目はがんばってやろう」という思いは、愛媛の教員時代のような学級だよりを出すことで、少しずつ形になっていきました。でも、もっとやれるのに、ここには同和教育の「ど」の字もないという空気を感じている私がいまいました。

先生方は、皆さんすごくいい方なのですが、その土壌がないために理解されないという、あきらめのような気持ちが私の中に先に芽生えていたとも言えます。「ろくな実践ができていない今の自分が情けない」という私の思いを聞いて、力になってくれたのが、愛媛の教員生活の最初の3年間を教員住宅の隣同士で過ごした友人でした。

彼女とは、1996年以来、全国同和教育研究大会を再会の場所としてきました。そのときの会場は長崎でした。翌年の熊本大会で、その友だちと一緒にいった分科会の会場で、A先生が発言されていました。彼女は、「あのA先生と出会ってほしいんよ」と熱く私に語り、翌年の奈良での全同教大会で、その友だちの言葉が実現したのでした。

#### 5 父の死とA先生との出会い

A先生は、私のこれまでの話をじっくり聞いてくださった後、「ぜひ授業を見においでや」と温かく言ってくれました。それが2ヵ月後に実現し、私の3度目の徳島行きとなったのです。

全体学習で語る先生方も生徒たちも、みんな本気でした。これまでの学習の積み重ねがあるから、あそこまで相手を信頼して、本音をぶつけ合えるんだなあ、すごいなあ、私は、ただただ圧倒されるだけでした。私

にはあんなことは無理だとも思いました。

しかし、授業のあとに、A先生は「雨の日には雨の日の過ごし方があるように、東京には東京での実践の仕方があると思うから、焦らずやればいい」というようなことを私に話してくださいました。(明るく)何と大きな器だろうとしみじみ思いました。佐藤文彦先生の資料やカセットテープもくださいました。いつ実践しようとワクワクしながら、明日子どもたちに会うのが楽しみだなあと、東京に戻ったことを今でもよく覚えています。前回、逃げるように徳島からフェリーに乗った時とは、全然違う気持ちの私がいきました。

実は、私を逃げる気持ちにさせた父は、この3回目の徳島行きの前年11月に亡くなっていました。全同教の奈良大会の会場で、トイレに並んでいた私に「Cさんやない？」と声をかけた人がいました。私はとっさに「違います」と答えました。声をかけた人は、高校生までを過ごした愛媛の実家の近所の人だったので、私の嘘はバレていたと思いますが、本当のことは言えない気持ちでいっぱいでした。

(涙ぐみながら)東京に行ってから、全同教大会に参加することだけが直接同和教育にふれられる機会だと思っていたので、とても楽しみでしたが、知っている人に会わないように注意しながら、うつむいて歩いていたのが事実でした。全同教大会が終わって東京に戻った後、10日くらい前に父が亡くなったということがわかり、私に「Cさんやない？」と声をかけた人は、そのことを私に教えようとしていたのかなと後から考えたものでした。

父が亡くなり、逃げる必要がなくなったことと、A先生に出会い、「東京には東京のやり方がある」と励ましていただいた時期が近かったことで、私の日常生活での緊張は、一気に解けていきました。それまでは、最寄り駅の改札口を出たとき、そこに父が立っていたらどうしようと不安に思うこともしばしばでした。住所と名前を書かなきゃいけないことは、なるべくしないような生活をしていました。

びくびくしていたので、愛媛に帰省もしませんでした。逃げたりうそをついたりして過ごすことは、とても苦痛でした。その必要がなくなったことと、今を肯定して生きることの大切さを教わったことで、少しずつ、自分らしいやり方を実践しながら、今、ここで、できることを追求していけばいいんだという、前向きな気持ちを持てるようになっていきました。本当に、とてもありがたい出会いでした。(その時々のお思いを、一言一言かみ締めるように)

あれから10年以上が経ち、今日が4回目の徳島です。1999年の夏休みからは、毎年愛媛に帰省しています。最初は、誰かの車に乗せてもらっても、絶対後部座席に乗り、なるべくいろんな人に見つからないようにしていましたが、徐々に人前に出られる私になりました。去年と今年は、夏休みの「宇和島市教職員人権・同和教育研修会」にも、ずうずうしく参加してしまいました。

中学・高校時代、「これ以上自営業を続けようとしても無理」という母の言葉に、全く耳をかさなかった父。大嫌いだった父のことが、ときの流れとともに、少しか認められる気持ちにもなっています。例えば、地区の人たちのために力を尽くしたことについて。うちの家族が愛媛にUターンする前までは、同和教育と同和对策事業がほとんどなされていなかった地区でしたが、父が何年も続けて区長をする中で、住みやすい地域に改善され、子ども会ができたことを素直に認められます。

## 6 就職差別を感じた大学4年の私

私が大学4年生の頃は、日本中がバブル景気に沸いていました。私が通っていた山梨の教員養成系の大学の学生にも、企業からの求人広告がたくさん届いていました。私の住んでいた下宿には、同級生が6人いたので、そういうダイレクトメールは同じものが6通届くのが普通でしたが、時々5通しか届かないことがありました。私以外の5人分はあるのに、私宛のものだけがないのです。企業には必要とされていない自分を感じました。

(力強く)平成の時代になっても、こんなに好景気でも、まだ「地名総鑑」が活着しているのかと、とても悔しい気持ちも感じました。そこで自暴自棄にならず、余計に気合いを入れて、教員採用試験の勉強に取り組むこと

ができました。それは、私が1人で勝手に精神的な強さを身につけたからではなく、地域の同和教育を推進することに熱心だった親や先生方の元で育ったおかげだなあとということが、今はよくわかります。と同時に、私自身が、一般企業に就職することの難しさの一面を見たことで、父が自営業にこだわったことも理解しなきゃいけないなあと、今は感じています。

私の義務教育時代を母校で見守ってくださった同和地区出身の恩師は、今は定年退職されてご自宅におられるので、帰省するたびにお宅に伺い、昔の実践を聞いたり、私の今の取り組みを報告したりしています。昔のお話を伺うと、私はまだまだだなあとと思いますが、焦る気持ちはありません。

## 7 私の受けた同和教育を ～これからは子どもたちへ～

今では、愛媛と東京の違いを冷静に認識して、子どもたちの実態にあった取り組みをすることが大切であるとわかっているのです。そして、何よりも大切なのは、「私が受けた同和教育を、今度は子どもたちに返していく番だ」という原点のような思いから、今の私がそれではないかの点検をしていただくことだとも思っているのです。

私は、同和地区出身であることを人に話すときもあるし、話さないときもあります。隠したいから話さないのではなく、言う必要がない場面だと思ったら言いません。それは、愛媛にいたるときも東京にいたるときも同じです。

私はこれまで、A先生から多くのよい資料をいただいたり、すばらしい実践を紹介していただいたりしていますが、その中の一つである、「自分以下を求める心」という資料は、高学年を担当するとよく使います。子どもたちが、自分の中にある自分以下の存在を求める心に気づき、本音で話し合いを始めると、差別することがどれほど不当なことが心に深く刻まれていっていることを実感します。

「雨の日には雨の日の過ごし方がある」という資料は、学級だよりで毎年保護者に紹介します。一昨年度、ある保護者から、「この資料に救われました」というお話を聞いたときには驚きました。この保護者の方は、その頃家庭の中がうまくいかず、すごく悩んでいらしたのだそうです。ぼろぼろになりそうな心を支えたのが、この資料で、「雨の日には雨の日の過ごし方がある」が載っている学級だよりを折りたたんで、いつもバックに入れて持ち歩いていましたとのことでした。私が同和地区出身だということを言う、言わないに関係なく、よい資料を選んで取り組んだり啓発したりすることが、何らかの役に立つことを実感しています。

## 8 吉田一子さんとの出会いから生活が変わった男の子

今年の1月には、識字学級で学習されている大阪の吉田一子さんのことを取り上げたテレビ番組と絵本を使って授業をしました。そのときのクラスには、家では盛んに話したり書いたりするのですが、人前、特に学校ではあまり表現活動ができない子がいました。いつも文章を書くときには、支援員さんがその子についてアドバイスをしながら1文か2文を書くがやっとなりました。

でも、その学習の最後に吉田さんにお手紙を書いたときには、その子は、1人ですらすらとたくさんの文章を書きました。しかも、自分を気持ちもいっぱい表現して書いたのです。びっくりしました。そんな子どもたちのお手紙を吉田さんに送ったら、なんとお返事をいただきました。そのお手紙にもお返事を書いたのですが、その子がまたまたすごい文章を自力で書いたのです。全文を紹介します。

「吉田一子さんへ

お手紙ありがとうございました。ぼくも毎日一生けんめい勉強しています。きょう、100マスかけ算で100点をとりました。音読の発表もできました。もっといろんなことをがんばろうと思います。吉田さんもがんばってください。」

このお手紙を見てびっくりしました。この子が吉田さんを通して、自分を振り返り、「ぼくも一生懸命勉強



しています」と、自分に自信を持ち、それをちゃんと表現していることが、私はめちゃくちゃうれしかったです。

うちの母が昔、「人の痛みがわかるようになったから、同和地区に生まれたことは全然辛い。」というようなことをよく言っていました。きっと、母より1まわり以上年上の85歳の吉田一子さんも、長い人生の中でさまざまな喜怒哀楽を経験され、その何かを子どもたちが感じとり、「この方になら自分を表現できる」というような、素直な力を引き出していただいたのだと思いました。本当にありがたいことでした。

吉田さんのことを学んだ後、子どもたちのノートの文字が、とてもいねいになったことも、思わぬ収穫でした。そして、子どもたち同士がお互いを認め合うことも、前よりもっとできるようになって、2年生を修了し、私も満足した気分での学校に異動しました。

## 9 湯浅 誠さんからの学びで感じた父の姿

今年の夏休みに、ずうずうしく参加した「宇和島市教職員人権・同和教育研修会」では、年越し派遣村の村長だった湯浅誠さんが講師でした。湯浅さんは、「自己責任論」ではなく社会のしくみを変えることで、貧困の問題と向き合わなければいけないと力説されていました。

私は、「反貧困」という湯浅誠さんの本を初めて読んだとき、私は同和地区出身だけど、「同和对策審議会答申」が出された2年後に生まれ、私が生まれた2年後に、「同和对策事業特別措置法」が制定・施行されたので、社会のしくみに守られるタイミングの中で生きてきた幸運を感じました。

高校・大学のときに、もし奨学金を受けられなかったら、私は教員にはなれなかったと確信しています。こうして、部落差別のことは、「わがこと」と考えられる私ですが、アイヌの人たちがどんなにつらい体験をされたか、ハンセン病にかかっていた方々がどんな思いで生活されてきたかなど、ちょっと前までは「ひとごと」にしていました。

湯浅さんのお話を聞きながら、東京で働いていた父が1996年に愛媛に帰って来たことについても考えました。父親に私の周辺をうろつかれ、ちゃんと働かないからこんなことになったんでしょと、まさしく、自己責任論をふりかざしていた私がいたことを認識しました。もしかしたら、それだけではいけなかったのではないかと…ということが、今やっとわかってきて、少し後悔しています。

学校には、大勢の子どもたちがいます。かつての私がそうだったように、家族の仲がよくないことへの不安を抱えている子、家にお金がないことを気にしている子、親が忙しくてさびしい思いをしている子、いろいろです。裕福だけど、大きな期待を背負わされて辛い思いを感じている子もいます。

そんな子どもたちのさまざまな現状について、子どもが悪いとか、保護者が面倒を見ないのがいけないとか「ひとごと」にしてはいけない。自分の後悔も生かしながら、子どもたちの現実をちゃんと見て、寄り添っていける教員になりたい。湯浅さんのお話を聞きながら、そんなことを思いました。

(一言一言を大切に大切にしながら)人権・同和教育の中で、これまで私が出会った方たちは、皆さん、お忙しい中でもとてもイキイキしておられました。東京に行って、最初はうつむいていた私が、そんな元気で熱い方たちとつながる中で、少しずつ前向きな自分を取り戻すことができるようになってきました。本当に、かけがえのない「出会い」や「つながり」があったことを、4回目の徳島訪問の前に実感しました。これからも、「出会い」と「つながり」に支えられながら、子どもたちの現実により添って、私の現状の中でできることを、しっかりと実践していきたいと考えています。

ご清聴どうもありがとうございました。

## 《コーディネーター A》

ありがとうございました。精一杯の語りが自らを癒していきます。私たちは生まれを変えることはできません。今の自分を精一杯生きることが問われているんだと思います。幸せは、私たちの心が決めます。そんな生

き方を私は貫いていきたいと思います。

板野中学校の子どもたちに、私は解放されていきました。私の世界が変わっていきました。今、北島中学校で、北島の子どもたちのさまざまな思いに触れて、自分というものがまったく違うものになっていきます。「出会い」と「つながり」の中で私たちが解放されていくんだと思います。

3人の語り、3人の訴え、3人の生きざまに触れて、一人ひとりの精一杯の思いを語る。その語りを通して、私たち自身がまた一步を踏み出していく。そんな時間を共有できたらと思います。10分間の休憩を取らせていただきます。

Bさんから話がありました。「愛南町人権ふぉーらむ」の記録の中に、Dさんの語りが活字になっています。その活字を通して、今日の語りにつなげていただければと思います。「私に何ができるか」「私を語る」そんな時間を共有できればと思います。

## 前半終了

### =意見交換=

#### 《コーディネーター A》

それでは、再開します。終了の時間だけは守りたいと思います。限られた時間ですけど、3人のパネリストの思いに触れて、自分のこと、自分の思いを出し合っただけでしたらと思います。

(しみじみと、誘いかけるように)本心を語るということは、日々の暮らしの中で、家族の中においても、職場の中においても、地域社会においても、なかなか表現できにくい空気があります。でも、私の中にこんな現実がある。こんな思いがある。このことはわかって欲しい。こんな苦しみがある。こんなよこびがある。そんな、「私」を伝えることを通して、「私」が癒されていく。そんな時間を共有できたらと思います。

昨年、中学生・高校生がいっぱい思いを伝えてくれました。涙も出ました。笑顔も溢れました。言葉は人と人を見事につないでいきます。そんな語り合いを今年も共有できたらと思います。それでは会場にマイクを回します。挙手をしてください。よろしくお願いします。(コーディネーターの言葉が終わると同時に、二人の手がすっと挙がる。会場端にまっすぐ身体ごと手を伸ばし、元気よく高校生の発言を促す)はい、じゃあいきましょう。

#### 《フロア 高校生》

(恥ずかしそうにしながらも、しっかりと前を向きニコニコと語り始める)私は、愛媛県の愛南町から来ました。(パネリストのBさんの温かく見つめるまなざしに支えられるように)Bさんの話にあった解放未来塾の塾生です。

最初の頃は、人の前で話をするのが苦手で、こういうふうにならぬ前で発言するという事は、あまりありませんでした。でも、中学2年の「愛南町人権ふぉーらむ」で、初めて一番に手を挙げて発表することができました。それは、周りが支えてくれて、その人たちのおかげです。これからも人権について学んでいきたいし、みんなをまとめていくようにしたいです。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。昨年の「愛南町人権ふぉーらむ」でも、真っ直ぐに手を挙げて、彼女が語ってくれました。その横で、先生方が顔をくしゃくしゃにしながら、いっぱい笑顔で彼女を見つめる姿が、本当に美しいかったです。精一杯の言葉というのは、私たちの心をつないでいきます。つながっていきましょう。(すかさず、前の席の女性が真っ直ぐに手を挙げる)どうぞ。

#### 《フロア S》

(すっと立ち上がると、フロアの方を向き語り始める)鳥取県から来ました。この鳴門の人権地域フォーラムに来るようになって6年になります。今日は、私がこの鳴門の人権フォーラムに来させていただくようになって、ここに参加されている皆さんとの本当に温かいつながりとか、仲間がたくさん増えたこと。そして、ここでこうして自信を持ってしゃべれることが、どんなに自分の日常の中で力になったかということの事実を、ひとつ紹介させていただきたいと思います。

(一呼吸し、思いをはせながらしっかりと語り始める)実は、去年も、このフォーラムで偉そうにして発表して帰りました。その日の夜に、私は職場の中で仲間はずしに出会いました。自分の職場の中で、同じチームの中で半年間、冷たい空気の中でそれでも少しでも仲間に近づこうとして精一杯努めていました。

しかし、私ともうひとり、その日夜勤をしていた看護師二人のいないところで、他のチームメンバーは全員で楽しい食事会の時間を共有していた。その会のあること自体も伝えられていなかったという事実を聞いたときに、「これだけみんなに近づこうと思った自分は、仲間の一人として認められていなかったのかな」、そんな思いになって、力が抜けていくってこういうことなのかなと本当に実感しました。日常の人間関係がスムーズなときなら、何でもよいような一コマですが、切ない人間関係の中での事実ただだけに、私の上に大きなのしかかりました。

そのときに一緒に夜勤をしながら、本当に怒りを共有してくれた仲間と語りながら、「次の日に行動を起こさなければ、私は、これまでこういう会で偉そうに言っていたことが口先だけになってしまう。言っていたことを実践できなければ、自分が言ってきたことが本物にならない」と、すごく強く思いました。

実際に自分の職場の中であって、何か事を起こせばより冷たくなってしまうかもしれない。その不安と、ここで何か行動を起こさなければ自分は本物になれないという思いと闘いながら、次の朝こんなことがありました。

院長が朝早くに職場にやってきます。夜勤で怒りを共有してくれた仲間と、院長を真ん中に挟み、アイコンタクトをとりました。「ちょっと、今言うか。」「もうちょっと、確認してから」その私たちの表情を院長は見取って、「何かあったかいや」その、かけられた言葉に、私は夜勤に出てきてこんなことがあったという話をしました。

話を聞いた後で、院長は、出勤してきた総師長に「おい、いじめがあったぞ。何とかせえ。こんな職場ではいけない。」とはっきり言い、その日に管理職がきっちり話し合いを持ちました。

仲間はずしの当事者の一人であった主任からは、本心だと思える謝罪がありました。次の日から一ヶ月の間、院内全部の部署で、その部署のトップが、「いじめの無い、仲間はずしの無い職場でなくてはいけない」ということを、朝の朝会の中でスタッフに話し続ける、そういう取り組みがありました。

(フロア全体をゆっくり見回しながら)それから先、ずっと続けて同じ空気が保たれるか。それはなかなか難しいかもしれません。でも、私はやっぱり、ここで出会った皆さんとの昼間のことを思い出しながら、「表面化すればもっと厳しい状況になるかもしれないけれど、でも、負けてはいられない。行動を起こさなければ、昼間に言ったことの意味が無い。」そう思いながら行動できたことで一番良かったことは、周りが変わったことではなく、自分が自分の一番近いところで、自分の辛さを口にできた。そのことで、自分が強くなれたと思います。

周りの空気は、少しずつは変わってきました。でもやっぱり、一番変わったのは自分だなと思います。自分のきついところを自分の一番身近なところで話しができた。思いを伝えられた。そのことで強くなれたと思います。

皆さん、周りが変わるかわからないか。それはその人たちの勝手です。でも辛かった思いをごまかして隠して、小さくなって暮らすのではなくて、自分はこんな思いがあったということを表面化することで、少しずつでも自分が変わり、周りが変わってくるんだなということを実感することができました。

(ニコニコしながら)それも、ここで皆さんと出会わせていただいている。このことが大きな大きな力になっ

ています。今日もここで、一人でも二人でも多くの皆さんの声を聞きながら、皆さんの思いを持って帰りながら、この、今日の出会いを力として、自分自身の確かな歩みの原動力にしていきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

このフォーラムは、参加者のさまざまな思いを噛みしめてながら、自分をみつめる時間になっています。皆さん、どう聞かれたでしょうか。皆さんの中に広がった思いをつなげていきたいとも思います。挙手をしてください。はい、いきましょ。

#### 《フロア I》

(すっと立ち上がり、フロアを向き、自分の言葉を確かめるように)北島中学校に勤めています。この鳴門の人権フォーラムに参加するのが今年で3回目になります。今日もそうですが、毎年、パネリストの方や会場の人たちから、熱い発言とか、非常にさまざまな思いを聞くことで、自分の気持ちとか心を強くしてくれるフォーラムとして、僕の中で非常に楽しみにしています。

お恥ずかしい話、私自身、小学校・中学校・高校・大学を通して、人権教育では「差別をしてはいけない」ということしか印象に残っていません。教師になって、今の中学校に赴任して、A先生とも出会って、「語る」ということの大切さを非常に実感しております。

勇気のいることですが、自分の思いをしっかりと語る。そのことで自分の心を解放していくし、また、他人の語りをしっかりと聞くことで、その他人の心がよくわかる。当たり前のことかも知れないですが、「語る」ということを、これからも大切にしていきたいと思っています。

もうひとつは、「知る」ということだと思います。知らないことや無知ということで、残酷ないじめもたくさんあります。僕自身、まだまだ知らないこともたくさんあります。こういう場に生徒と共に積極的に参加して、さまざまな人の思いとか生き様に触れ、自分の心をどんどんどんどん高めていくことだと思います。今日もまた、いろいろ聞きたいなと思いますのでよろしくお願いします。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(一言一言を大事にしながら)Bさんの思い、その生きざま。Dさんの思い。Cさんの思い。その生きる姿を通して、心に刻まれたこと、それを言葉にしていく。そのやりとりが、私たちを大きく前進させていくんだと思います。時間も限られています。いかがでしょうか。じゃあ、いきましょ。

#### 《フロア 高校生》

(書いたメモを持ち、最前列からフロアを向き、メモを見ながら一生懸命語りが始まる)解放未来塾に入って変わったことは、まず、他人と話しができるようになったことです。以前はみんなと全然話すことができず、毎日が不安でした。未来塾に入ったことで、たくさんの人と話すことができ本当に良かったと思います。

あと、入る前は、そんなに人権のことに触れる機会がなくて、人権のことはあまりわからなかったけれど、未来塾に入ったことで人権について興味を持つことができたので、これからも、もっと人権のことを学んで、たくさんの人に人権のことをわかってもらいたいと思いました。(語り終わりほっとしたように表情が和らぐ。会場からは拍手が起こる)

#### 《コーディネーター A》

(発言し終わった高校生に、いっぱい笑顔を返しながら)よかったよ。ドキドキしながら思いを語る。すごくよかった。立派に役目が果たせたよ。(会場から温かい笑いが起こる)はい、いきましょ！どうぞ。

## 《フロア 高校生》

(立ち上がり、両手でしっかりとマイクを握り締め、生き生きと語りはじめる)鳴門高校2年生です。私は初めてこの人権地域フォーラムに参加して、たくさんの方が参加しているのを見て、とてもうれしくなりました。私は、こういう人権の会があることを友だちに話したんですけど、友だちはみんな、「大変そうだな、」としか言ってくれないので、それが私にはすごく悲しいです。

でも、「それはよくないよ」と言うことができないので、そういうところがまだできていないと思います。これからは、そういう子たちに、「人権は大切なんだ」ということを、自信を持って伝えていけるようにしていきたいです。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(温かい笑顔でしみじみと)教室の雰囲気、職場の雰囲気、その雰囲気に生かされることもあります。でも、その雰囲気に負けてしまって、「もうええわ」って、自分を押し殺していく。我慢して我慢してという、そんな現実もあります。

(力強く)でも、その雰囲気をつくるのは私であるということです。その雰囲気の中にいるのは私であるということです。私に何ができるか。私がそこにいることで、横に座っている子が、前にいる子が、ちょっと元気になる。そんなやり取りができれば、うれしいなと思います。

「私」なんです。大事なのは発表することだけじゃないんです。一生懸命聞くんです。噛みしめるんです。ドキドキしながら聞くんです。「私は何を言えるんだろうか。」「何を語れるんだろうか。」「今、マイクを持ったら、どんなことを伝えることができるんだろうか。」そのことを考えながら、ドキドキしながら聞くんです。その表情が、その思いが、空気をつくっていきます。

限られた時間です。年に1回のフォーラムです。ここに来てよかったという時間を皆さんと共有したいと思います。挙手してください。いきましょう。どうぞ。

## 《フロア M》

(前を向き、笑顔いっぱいにして)今日は良いお話をいっぱい聞かせていただいて、ありがとうございます。鳥取県から来ました。隣に座っていらっしゃる佐伯さんと、私の好きなFさんが2年前のフォーラムでパネラーとして前に立たれて、応援に来ました。私が仕事を退職する一年前のことです。そのときに、たくさんの中学生の皆さんから元気をもらいました。

今年も、どうしても参加したいと思ってきました。仕事は教育委員会におりました。そのときには出るのに「仕事だ」ということで出やすかったです。でも、この度は、「仕事が済んだのに、何をいつまでも出る」という声の中で、それでもやっぱり、あのときの皆さんの思いを思い出して、また勉強したいなと思って来させてもらいました。必死で来ました。「来て良かった！」って思います。

里温ちゃんがこんなに大きくなって、この長い時間をよくいい子でいられたなど、すごく感心しました。(笑顔いっぱい)私は、教育委員会に入る前は保育者でした。小さい子どもたちを預かっていましたので、そのしんどさがよくわかります。思わず彼に「あなた、すごいね。偉いね。」と言いました。(表情を少し改めながらも、ニコニコと笑顔で聴いているコーディネーターを前に、生き生きと声が弾む)C先生のお話を聞いて、私も言いたいなと思いました。

きれい事で言いたいなあとあって、佐伯さんの真似もしまして、この度来るときに少しまとめてきました。でも、そんなメモしたことは吹き飛ばしてしまいました。A先生は、3人の思いを聞いて、今の自分の悩みを語れとおっしゃったので、「そうだな、私はこのために来たのかな」と思いました。

(涙ぐみながら)私の悩みを言いますと、私の姑ですが、91歳になります。非常に認知症が進みました。佐伯

さんは看護師さんでいらっしゃると思いますので、ここへ来る間にいろんな事例を聞かせてくださったんです。「ああ、まともに受け取り対応しているなど、自分の至らなさを感じます。それから、Fさんが言ってくれた、「自分のできることで、目の前の人を大事にして生きていかないけんよ」という言葉を思い出しました。C先生がお父さんに対しての思いをひとつずつ乗り越えていらっしゃいます。私は、姑に対して、「あれだけ大事にしてきたのに、何だったんだろう」という思いをいっぱい抱えて来ました。

来る途中で佐伯さんに、大分、その思いを流してもらったんですが、先生方の話やBさんの話を聞いて、「まだまだ頑張らなければ」という元気をいっぱいもらいました。また頑張りたちと思います。本当にありがとうございました！！(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。本当に限られた時間です。今という瞬間を大事にしていきたいと思います。はい、いきましょう。

#### 《フロア N》

神奈川県の大和市というところで中学校の校長をしています。3年前にA先生が横浜に来られたときに、ここで知り合って、A先生から「徳島は良いよ」と言われると、来たくなるんですね。(ニコニコと)誘われるままこの会に参加して、「いいなあ」と思いました。小豆島の先生に会ったら、「小豆島も良いよ」と言うので、家族と小豆島へも行きました。(会場から、笑いが起こる)

すごく単純な人間なんですけど、特に、C先生が東京の八王子から来られているということで、チラシを見て、去年、一昨年以上に興味を持って来ました。C先生のお話の中に、「同和教育の『ど』の字もない」という言葉があったと思うんですが、正直、関東の方だと教育委員会で社会教育を担当していたときは、「同和・人権教育」だったのが、「人権・同和教育」となり、同和教育が見えなくなってきました。

地元の校長会の中でも、中学校が9校あるんですが、「今年も徳島へ行く」と言うと、中には、「何で行くの？ あっちは大変みたいだね」と言われます。「あっちは」という言葉の中に、すごく差別性を感じたりしています。同和教育の「ど」という字がないということは、事実感じます。子どもたちに「同和問題」と言っても、ほとんどの子はわからないと思います。

先生方は同和問題についても、研修などで受けるかもしれないけれど、このフォーラムの言葉ではありませんが、「ひとごと」という感じがしているのではないかと思います。でも、C先生が感じておられるように、差別はあると思います。いじめはもちろんあるし、人を蔑む気持ちもあるし。それは、大人だとか子どもだとかの分け隔てなくあると思うんです。

(切々と)C先生のお話の中で、すごく頑張っておられることがわかりましたので、子どものことがわかっておられる先生だからこそ、やれることってたくさんあると思うんです。私は今年60歳で学校を去りますけれど、すぐ近くですので、お話もしたいし頑張っている気持ちも伝えたいと思います。以上です。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どんどん交流が広がっていきます。出会いとつながりを噛みしめていきたいと思います。いかがでしょうか？いきましょう。どうぞ。

#### 《フロア 男性》

ちょっと教えてください。私の娘は同和地区の人と結婚をして、一般地域と言われる所で今住んでいるんですが、中学校1年生の孫がおります。娘夫婦からは、私らが困ったときには、父ちゃん勉強しているから助けてよと言われるんですね。私は、その孫から同和問題について聞かれたときに、どんなふうに説明をしようか

など迷っています。

### 《コーディネーター A》

時間が限られてきていますので、できるだけ発言を保障したいと思いますので、ちょっと話をさせてもらいます。(力強くはっきりと)大人です。私です。教師である私です。教師が生き生きしていたら、それぞれの教師がとことんそのことを語っていったら、子どもたちも同じように語ってくるんです。

家庭の食卓に、「同和」という文字が書かれたチラシがある。それを見た瞬間、親が表情を変えてそのチラシを隠す。その姿に、そのときの親の表情に、子どもたちは切ない思いを噛みしめていきます。でも、私たち大人が、生き生きとそのことを語っていったら、子どもたちは、私たち大人の姿を通して、差別をなくすということがどんなに誇らしいことであるか。どんなに素敵なことであるかを自覚していきます。

「今日、人権のフォーラムに行ってくるよ」と言ったときに、父親や母親が、「しっかり勉強しておいでよ」と言う会話ができる家庭だったら子どもは本当に幸せになると思うんです。

私たち一人一人の「誇り」と「自信」です。「私」なんです。わからない人もいます。Dさんが本当に厳しい現実を乗り越えてきました。彼女の語りにあつたように、人間は変わるんです。結局、「私」なんです。「私」という人間をひたむきに生きる中で、私たちの世界が変わっていくんです。

これは中学生にしても、高校生にしてもそうです。私に何ができるかということ。そのことを語り合うために人権学習があるし、私たちの関係性があるんだと思います。できるだけ多くの意見を保障したいと思います。いきましょう。どうぞ。

### 《フロア 男性》

(立ち上がりフロアの方を向き、思いを込めて丁寧に語り始める)阿波市から来ました。「私」を語れと言われてたんですが、とりあえず代理で語りたいと思います。

(身振り手振りを加えながら)熊本の話を一つだけさせてもらいます。地区と地区外の結婚がスムーズに進みました。反対にも会わずに進みました。女の子の方が地区だったんです。男の子の親に伝えずに結婚したんです。それは、男の方が、「伝えなくてもいいよ。差別はないんだから」ということで、「男性側の親には女性が同和地区出身であるということをお伝えしない」という事実を、女性側の親には伝えた状態で結婚したんです。

今、熊本で起こっていて、これから先、徳島でも絶対に起こることだと思います。それは何かというと、今、熊本、特に過疎が進んでいる方では、老人の孤独死がすごく進んでいる。なおかつ、地区のじいちゃんばあちゃんが、たった一人で死んでいく。特に多いのが、結婚をスムーズにした家庭に多いんです。

ばあちゃんがしんどくて入院しました。本当は娘に会いたい。だけど、嫁ぎ先に連絡入れません。もし、連絡が入ったとしても、「私、すぐに良くなるから来なくていいよ」と断るんです。また、自分の地域に孫を連れて帰ってきて欲しいです。でも、「帰ってこなくていいよ」と言います。どうしてそんなことを言うかという、帰ってきたら、自分の地域を親戚や自分の周りの人に見られたら、「地区かもしれない」という結婚後差別がおこるかもしれない。孫たちが悩むかもしれない。もう、部落ということはないことにしようと考えて、子どもたちを里にも帰らせず、自分の顔も見せず、会いたい孫にも会わずに亡くなっていくという事例がおこっています。

それが、本当に差別がなくなった世の中だと言えるのでしょうか。我々が進めてきた人権教育、同和教育というのは、こんなことのために進んできたのかなと思います。今、たとえ部落でなくても、100歳の老人が行方不明になっているという事例がたくさんおこっていますが、あえて、差別が残っているがゆえにおこっている老人の孤独死。そういう現実があります。

そういうことがまた繰り返されて、次の世代にやって来るということをお伝えしたいと言う熊本からの願いがあったので、徳島の皆さんにもお伝えしました。これからもそういうことが起こらないために何が必要か。

答えはわかりません。でも、みんなで考えていったら絶対に防げると思います。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。さまざまな現実があります。その思いを出し合っていきたいと思います。いきましょう。

#### 《フロア 中学生》

(立ち上がりまっすぐに前を見て、懸命に語り始める)香川県の中学校から来ました。講演を聞いて、私のお母さんも同和地区の人と結婚しました。お母さんが、自分の親に結婚していいかと聞いたら、「そんなの、あかんに決まっているやろ」と言われたことは、私の中にも記憶があります。

いろんな方々の講演を聞いて、うちのお母さんもそんなに辛い思いをしたのかなと思いました。今日来てよかったです。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

はい、つながってきましょう。どうぞ。

#### 《フロア 中学生》

(立ち上がり、精一杯の思いを込めて)小豆島から来ました。このフォーラムに参加するのは2回目なんですけど、去年の全国高校生集会で、「大きいじいちゃんが同和地区出身で、字が読めないかもしれん」ということを話したんですけど、その、大きいじいちゃんが最近死んでしまいました。

ばあちゃんに、「じいちゃん、字が読めなかったのと違う？」と聞くと、じいちゃんは小さいときから病気がしていたから、学校にも行ってないし、識字学級というのもそのときには地区になかったからやってないし、ばあちゃんが、学校からもらってきた資料をじいちゃんに渡しても、すぐにばあちゃんに渡して、「この紙を読んでくれ」と言います。

じいちゃんは、字を読めないし、書けないし、人の話を聞くだけだったので、じいちゃんが活着ている間に、自分ももっと勇気を出して聞いてあげて、本とかも読んであげたらよかったですと思いました。ちょっと、後悔しています。でも、このフォーラムで、このことを言うことができよかったです。今日はありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

自分を語る場として、自分を見つめる場として、この時間を大事にしていきたいと思います。ぜひつながってください。…はい。じゃあ、いきましょう。

#### 《フロア 男性》

愛媛県から参りました。今日は、C先生が来られるということで、ぜひともという思いで参りました。(ゆっくり丁寧に思いを届けようとするように)C先生とは、私が愛媛県にある吉田小学校に赴任し、同和教育推進主任になった2年目にお会いして、それ以来ずっとお付き合いをさせてもらっているんで、今日はお話を聞かないかんということでここに来ました。

私はお付き合いさせていただく中で、先生の生き様の素晴らしさに打たれて、人生を見つめながら生きていくというか、自分の思いを子どもを通して実現しようとする真摯な態度に打たれて、私が育てられました。(しみじみと)今日、3人のお話を聞いて、やっぱり同和教育ってすごいなあと思うんです。和解できない人はないというか、つながり合うということが可能になる。どんな人とでもつながり合うことができるんだという



ことを示してくれる。それは、人生を切り拓いていくことのもっとも大切なことだと思うんです。

Dさんのお父さんやお母さん。Bさんの結婚のとき。そして、C先生のお父さんのこと。まだ、本当には乗り越えられていないかもしれないけれど、過去はこのようにして変えていける。学ぶことによって変えていけるんだということを、今日の3人のお話の中でつくづく感じました。

それで、私のことをちょっと語らせてもらいたいと思います。私は、同和教育推進主任をしたのはたった1年でしたが、それ以来、同和教育のすごさに引かれながら学習を進めました。その関係ですごくいいことに出逢いました。それは、私の娘が結婚をしたときです。私の娘は中国の人と結婚することになりました。その中国の人というのは、中国の中では被差別の立場にある人です。

その人と結婚をするということを決めたときに、私が娘に「なぜ、中国の人と結婚をするの?」と聞くと、「私はね、中国にいたときにこの人のおかげで生きられた。この人の支えがあったから生きることができたの。」と言ってくれました。

中国がどう変わっていくかわからない、そんな抗日運動の激しいときでした。娘が中国に行ったときも、「日本人、帰れ!」というような、日本人に対する差別の中でしたが、それをこの人が支えてくれたから結婚したいんだと聞いたときに、何のわだかまりもなく、「それじゃあいいよ」と言えたのは、同和教育で学んできて、「結婚とは何なのか」というような、生きることの核心を教えられていたから、私たちが祝福し支えることしかならないと思うことができたんです。

本当に語りだしたら語りきれないくらい、この同和教育のおかげで今の私がここにあると思えるんです。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

本当に残りの時間がわずかになりました。この時間を本当に大事にしていきたいと思います。できるだけ多くの人にマイクをつないでいって欲しいなと思います。じゃあ、いきましょう。

#### 《フロア 中学生》

(立ち上がり、思い切ったようにフロアを向き、精一杯の思いを語り始める)北島町の中学3年生です。今日、3人の人の話を聞いて、差別のあることに気づくことができました。私は差別されたことがあります。名前の中で言われたことがあったので、他に悪口を言われている人とかがいたら、自分が誰よりもわかっているつもりでした。でも、本当は、自分が思っている以上に傷ついている人がいるんじゃないかと、今日の話で気づくことができました。だから、まずは、その人たちの気持ちをわかって、正しく行動できる人になりたいです。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(しみじみと)大勢の中で語ることは、大人にとってもやっぱりドキドキします。でも、グッと手を挙げて、自分を伝えることによって、自分の道ができていくんだと思います。そんな、自分と出会い直していく、そんな場をつくっていきましょう。はい。じゃあ、いきましょう。

#### 《フロア 中学生》

(精一杯言葉をさがすように)応神から来ました。さっきの熊本の話を聞いて、最近、友だちに「好きな子がおるんやけど、もし、その子とうまいことって結婚を前提ということになったときに、友だちは地区の子なんですけど、その子が相手の親に、自分のことを伝えるべきか伝えないべきかと相談されたんです。

結果的に「言った方がいいのちがう」ということで終わったんですけど、中途半端に終わったんです。今日の講演などを聞いていて、その子に、もしそういうことになったときに、自分のことを言った方がいいぞと

教えてあげたいと思いました。(拍手)

#### 《フロア 男性》

(立ち上がるのと同時に、思いがあふれ、早口で切々と身体中で語り始める)愛媛県から来ました。今日、ここに参加するのは3回目なんですけど、Cさんが話をするということで、それじゃあどうしても参加しなくてはと思って、仕事もいっぱいあったんですけど、それをホッポリ出してきました。

Cさんが愛媛にいたとき、文通していたんですけど、突然にCさんがいなくなりました。「探さないでください」と言っていなくなりました。「どうしたん!」と思いました。はっきりした理由は、私はまだ知らないんです。

突然目の前からいなくなった。手紙だけが一通来た。どこへ行ったのかもわからないし、探さないでくださいと言う。「何か私にできなかったんだろうか!」という思いがすごくありました。仕方がないので、Cさんが朝日新聞を取っていたことを知っていましたので、とにかく、朝日新聞の広告に「Cさん元気でやれ」と出そうと思っていたら、彼女から何人かの知り合いに対して手紙が来ました。

「探さないでください」と言って私たちの前から姿を消したCさんですが、今日の資料のコメントにあるように、人とつながることを求めて、手紙をくれたんじゃないかなと思って、「あのときに何かができただろうに」という後悔は、今でもすごくあります。今日はいい話を聞かせていただきました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

後わずかです。いきましょう。

#### 《フロア 中学生》

(立ち上がり、フロアに向かってゆっくりと精一杯語り始める)北島中学校から来ました。A先生に誘っていただいて、初めてこの場にきました。初めて同和地区の人から話を聞いて、自分は今まで本当に何も知らなかったの、ちょっと後悔しています。小学校でも勉強しましたが、中学校ほどきちんと取り組んではい wasn't でした。知らないことがたくさんあると思うので、どんどん知っていきたいです。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

精一杯の思いを、できるだけ多くの人に言葉にして欲しいと思います。いきましょう。…あと、一人か二人…。(手の挙げた男性に向かって)はい、最後ですね。(会場から温かな小さな笑いが起こる)

#### 《フロア F)》

小豆島から来ました。第1回から来させていただいています。隣にいる子どもたちが、さっきから、手を挙げようかやめようかと途中まで挙げかけて迷っていて、いつ行くかなと待っていたんですけど、そのうちしゃべってくれると思います。

本当に今日はありがとうございました。Bさんの「自分を見て判断してくれると思ったのに」という、そういうすごい当たりまえのことが実現しない現実というものを、今日は本気で受け止めました。Dさんは、去年の小豆島の町のフェスタに来ていただいて、そのときの話で、めちゃくちゃたくさんの子どもの背中を押していただきました。そのときにいて、「もう一度Nさんの話を聞きたい」と言って、今日来た子もたくさんおられます。

C先生は初めてお会いしましたが、それだけ自分のことを見つめて、子どもたちを見ておられる先生に出会い、自分はそんな取り組みができているのかなと思いました。もう一度自分を見つめなおさないといけないと感じました。小豆島も、一人二人この会に参加する仲間が増えてきました。子どもたちも連れて来ることがで

きるようになりました。来だして、少しずつ子どもたちの手が挙がり出して、今、仲間が増えてきています。小豆島でも、スタイルは違いますが、子どもたちが語る姿をいろいろな人に見ていただいて、啓発を続けていくという取り組みが少しずつできています。また、今日学んだことを帰ってやってみたいと思います。

小豆島でも、12月4日の取り組みとして「土庄(とのしょう)町人権フェスタ」というのがあります。もし、機会がありましたら、来て頂きたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(ニコニコしながら)ドキドキしながら話を聞いてくれた中学生。もういいですか?…はい、じゃあいこう!

#### 《フロア 中学生》

(立ち上がり、ノートを開き、懸命に読み始める)僕は小豆島から来ました。Dさんのような考えの人は、何かが変わるのかな。そして、自分の何かが変わるのかなと思いました。今日はDさんの話が聞いてよかったです。ありがとうございます。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

はい、ありがとうございます。よかったなあ。(中学生が座るのを待つ)今日は本当にありがとうございました。自分の思いを精一杯言葉にするという作業は、勇気が要ります。でも、そこからしか始まっていかんものがあります。私に何ができるか。

私を伝えることを通して、誰かが変わるんじゃないんです。私が変わるんです。私が変われたらいいんです。私に何が問われているか。「雨の日には雨の日の生き方がある」という言葉をC先生が、繰り返し語ってくれました。私には私の人生がある。私にできる、私の生き方がある。そして、私の幸せがある。その生き方を精一杯しっかり貫いていく。そんな生き方を噛みしめていく。

年に1回のフォーラムです。何を学び、何を噛みしめ、何を伝えることができるだろうか。そのことを通して、家族と、職場で、いろいろな人とのつながりの中で、何を語るんだろう。そんなことを検証しながら、この今日の半日をまた振り返ってくれたらと思います。

最後に前の3人に、一言ずつ思いを語っていただいてこのフォーラムを終わりたいと思います。C先生からいきましょうか。

#### 《パネリスト C》

今日はこのような機会を与えていただき、どうもありがとうございました。皆さんのお話を聞きながら、やっぱり、私は同和教育をしてきてよかったなと思いました。

今日はちょっとしか話に出てこなかった私の姉は、全然同和教育のことは関心がなくて、多分、結婚相手にも自分が同和地区出身であるということは話をしていません。私は、結婚はしていないんですが、姉と比べてどちらがいいかなと思ったときに、私は、こういう機会にいっぱい恵まれている私の方が得しているような気がしています。

私は、うちに解放新聞とか、住井すゑさんの「橋のない川」というような本がいっぱいあったので、親から言われなくても、うちは同和地区なんだなということを薄々気がついていました。母と、お盆で話したときに、母は「自分から教えた」と言っていました。私は母から直接教わった記憶はありません。でも、家にそういうものが普通においてあって、地区の人が集まって、これからどうするかという話し合いを自然に耳にする中で、「ああ、私たちはそういう所に生まれたのかな」と理解してきました。

そこにいる人たちが、生き生きとしているというか、「こんなところに生まれて嫌だ」と言っていなかったことが、まず、スタートとしては良かったのかなと、今回、いろいろなことを振り返りながら感じました。こ

れからも学びを続けて、もっともっと、「勉強してよかったな」「いい出会いがあったな」ということを繰り返していきたいと思っています。これからも、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。(拍手)

#### 《パネリスト D》

(そばにいて甘える里温君を、笑顔いっぱい重そうに抱き上げる姿に、会場から温かい笑いが起こる。抱き上げたとき、フロアから里温君に対し、質問が飛ぶ「お名前は?」「N里温」ははっきりと大きな声で答え、恥ずかしそうに母親に甘える里温君に、拍手と歓声が起こる。抱き上げたまま語り始めるが、片手で抱き続けることに無理を感じ、そっと下におろし改めてマイクを握る。その間、会場に二人を見守る温かい空気が流れる)

(明るく)長い時間だったんですが、何とか耐えられたみたいです。私が一番辛いときに、たくさんの言葉を多くの方々からかけていただきました。中でも、佐伯さんが私に贈ってくれた言葉で、「実家というのは、生まれたところをみんなが実家というけれど、私はそうは思わない。これからパートナーと二人で、本当の家、「実家」を作っていったらいい。生まれ育った家は、生家ではあるけれど、これから新しい戸籍を作り、生活するその場が私は実家だと思う。」その言葉にすごく励まされて、大丈夫だと思ってやってきました。

本当にたくさんの人の支えがあって、今があると思います。これからは、この子のために一生懸命頑張っていきたいと思っています。今日はありがとうございました。(拍手)

#### 《パネリスト B》

今日はありがとうございました。(フロアの愛南町の仲間の方を見ながら、笑顔で)今日、この会場で一番に手を挙げてくれた解放未来塾の塾生。5年、10年前、こういうことを本当に夢に見ながら、子どもたちが伸び伸び育ってくれたらいいなと感じながら今があります。

決して、今日ここへ来るまでの5時間、子どもたちを洗脳したわけでも(会場から明るい笑いがおこる)ありませんし、強制したわけでもありません。やはり、ここに来るということは、「自分の言葉で語ろう」というふうには、はじめから思っているんだろうと思います。

すべての子どもたちではありませんが、一人でも二人でも育つことによって、その姿を周りの子どもたちが見てくれる。今日、ここに来たこの子らも、5年前には中学生・高校生の姿を見て、「ああいうふうになりたいな」と言っておりました。愛南町でも、「人権ふおーらむ」が毎年あるんですが、「次の年には私が手を挙げる」と、ふおーらむの終わった後で話している。上の子を見ながら目標を持って、自分なりにがんばっているということを、また、こういう場で確認ができて、こうしてお話しする私の言葉を、「じわっと涙をこぼしながら聞いてくれました。本当にありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

(あふれるような笑顔で)ありがとうございました。アツという間の3時間でした。昨年、N君が、響希君を肩車して、Dさんが最後に語るときに、そのまま里温君をDさんから受け取り抱っこして、N君が肩車していた響希君を落としそうになって、本当にびっくりしたんですが、(会場から、昨年を思い起こし、明るい笑いがおこる)あのときのDさんの言葉がずっとずっと力をくれます。(力強く)

今日の中学生・高校生。やっぱりまぶしいです。背筋をきちっと伸ばして、一生懸命話を聞く姿に感動します。Dさんを通して、里温君を通して、会場の中学生・高校生を通して、本当に人権を学ぶということは本当に素晴らしいことだと思います。さまざまな立場や年代の方が集まっておられるフォーラムです。この場に出会えたこと、この出会いを確かなつながりとして、私たちの日常をがんばっていきたいと思います。最後に、子どもたちへの感謝の思い、よくがんばってくれた里温君への感謝の気持ちを込めて、私の大好きな言葉を紹介します。

子どもは 悠久の命を受けつぎ  
生命を受け渡す かけがえのない存在である  
子どもは 無限の可能性を持つ存在である  
子どもは 大人により尊敬されるべき存在である

人権は 人間性の尊厳をあらわにする  
人権は 生命を生み 生命を育てる  
人権は 美しい言葉を生み 豊かな文化を生み出す  
人権は 人々を結びつける  
人権は 争いをとめ 世界の平和を作り出す  
そして 人権は 人類の未来を拓く

(しみじみと)年一回のフォーラムで、今年も出会えたこと。感謝の気持ちでいっぱいです。語ってくれた3人のパネリストの皆さん、フロアから、ドキドキしながら一生懸命思いを伝えてくれて仲間。そして、それを必死に受け止めてくれた会場の皆さん。お互いに感謝の気持ちを込めて、拍手をして終わりたいと思います。(精一杯の感謝の思いを込めて力強く)どうもありがとうございました！

(壇上の4人が、共に丁寧にお辞儀をし、会場いっぱいの大きな拍手が起こる)以上で人権地域フォーラムを終わります。